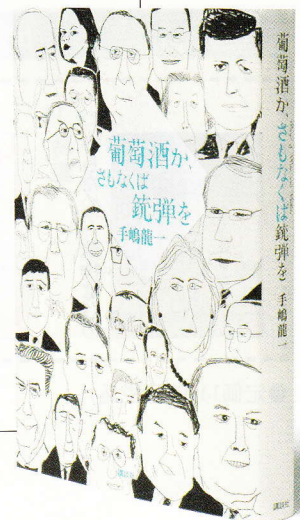




本の時間

enjoy reading

手嶋龍一



『葡萄酒か、さもなくば銃弾を』

講談社
本体価格1700円＋税

●てしま・りゅういち NHK・ボン支局長を経て一九九七年から八年間にわたりワシントン支局長を務める。同時多発テロ事件では一日間連続の昼夜放送を担当し、冷静な分析が視聴者から支持を得た。二〇〇五年に独立翌年発表した「ワルト・ダラー」が大ベストセラーとなり、日本初のインテリジェンス小説と評された。



「新しい年とともにアメリカ大統領選の指名争いの声があがりましたが、この本はそのときには、ほぼ脱稿していたのです。私はすでに、オバマの予備選勝利を確信していましたから、彼を描いた章を、躊躇なく冒頭に据えました」

「日本初のインテリジェンス作家」の情報感覚が冴える。それにしても、結果が、もしヒラリー・クリントンの逆転勝利に転んでいたら、四月下旬には店頭には並んだ本書の「クレディビリティ」（信用性）は、どうなっていたか。想像するだに、背筋を寒げが走る。

著者が選り出し、描く政治家には、一筋縄ではいかない難物が多い。自らを悪食と称する。

そんなわけで、ドイツのヨシユカ・フィッシャーなども、当然入っている。フィッシャーは、シュレーダー政権で、副首相と外相を兼任した。かつては武闘派といわれた反体制派。緑の党の創設に関わり、脱原発政策の実現に寄与した。「彼は独政界では大学の入学資格を持たない少数派ですが、人間の知性とは何の関係もないと彼から教えられます」

二人のなかには、日本の政治家も含まれてはいるけれど、世界に伍してとなると、どうしても見劣りするのだが――。

「世界に影響を持つ国家であるためには、それなりの先導者が必要かなと感じます。いまの日本の政界では、そういう人物を見つけない。だからこそ、私が、切り結んできた人々の素顔を次の世代に語り継ぎ、伝えていくことも意味があるかもしれない」

手嶋さんはそれでも、ひとりだけ「忘れられない存在」として、近藤元次の名を挙げた。農政通で佐渡島出身の衆議院議員。一般にはほとんど顧みられない。「やはり私は、マジナルな人がお好みらしい」

近藤は、一九九〇年代のはじめ、日本に農産物の自由化を迫るウルグアイ・ラウンド最終交渉で、欧米各国の外交官たちを

向こうに回し、まるで練達のネゴシエーターを思わせる冴えを見せたという。ところが、九四年に突然この世を去ってしまう。米の減反政策の見直し論議がはじまっている現在こそ、求められる政治家なのかもしれない。

もともと、このラインアップには、まだ超大物の姿が少ない。周恩来、李登輝、あるいは金大中など。「彼らを巡る出来事を軸にして、改めて挑戦したい」とのこと。楽しみである。

世界に影響を持つ国家に必要な先導者像とは